



コメニユース研究の新資料について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 義哲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000976

コメニユース研究の新資料について

松 田 義 哲

北海道学芸大学岩見沢分校教育学研究室

Yoshiaki MATSUDA : On the Newly Discovered
Works of J. A. Comenius

I 新 資 料 の 価 値

わが国におけるコメニユース研究の最も新しい文献の一つは梅根悟著「コメニウス」(昭和31年牧書店)だと考えるのであるが、この書にさえもれていて、コメニユースの著作としては重要な価値をもつものがある。尤も上に掲げた書は参考文献として *The Analytical Didactic of Comenius translated from the Latin with Introduction and Notes by Vladimir Jelinek, The University of Chicago Press, 1953* の名だけはあげているが、実はその中に新しく発見されたコメニユースの著作についての説明があることにまでは言及していない。

それでは、その新しく発見されたコメニユースの著作とは何であるか。それは汎知主義の全体系をなす大著であり、1645年その第一巻が完成した「人事改善に関する大会議」(*De rerum humanarum emendatione Consultatio catholica ad genus humanum, ante alios vero ad eruditos, religiosos, potentes Europae*) に関するものである。この書は全七巻で完結する構想をもつものであつたが、実際に完成してコメニユースの生前に出版されたものは、全七巻のうち、献辞としての「ヨーロッパの光」(*Europae luminibus*) と第一巻の「汎覚醒」(*Panegersia*) と第二巻の「汎黎明」(*Panaugia*) だけであつて、あとの五巻は行方不明と考えられていた。従つて、さきの梅根教授の「コメニウス」にも第一巻及び第二巻については簡単な説明が出ているが、あとの第三巻から第七巻までについては何らの解説も与えられてはいない。ところが梅根教授がその名をあげるにとどめたエリネツクの著書の中に、その不明とされていた第三巻から第七巻までの各巻についての詳しい解説がなされている。エリネツクはそれらを「ハレー稿本」として一括している。

さて殆んど三世紀のあいだ行方不明と考えられていたコメニユースの五つの著作が発見されたのは1935年のことである。発見した人はチチエヴスキー (Cyževskij) 教授である。彼はハレーの孤児院の記録保存所の中でこれを発見した。そしてその発見についての解説を公けにしたのは1940年のことである。コメニユースのこの五つの著作は、実は、コメニユースの死後、クリスチャン・ニグリン (Cristian Nigrin) とパウル・ハルトマン (Paul Hartmann) とによつて出版されることになり、1678年の終りまでには出版の運びになつていたのであるが、けつきよく出版にはならなかつた。しかし1700年ごろの全著作の原稿がユスツス・ドセミユス (Justus Docemius) の手に入り、彼はそれらの草稿をハレーの孤児院に委託した。これらの草稿は1702年ブツデ版「汎覚醒」のためにブツデによつて用いられたが、その後それらはチチエヴスキーによつて発見されるまで行方不明になつていた。これらの行方不明の著作が1935年に発見される前は、その内容が

汎知主義に関する他のコメニユースの著作や同時代人が日記や書簡で述べていることなどから広く推測されたりしていた。また価値ある証拠がマレシユース (Maresius) の論争的な著作によつて与えられた。彼は1669年「汎改革」(Panorthosia) (筆者註、この著作の第六卷)——そのところどころをコメニユースが少数の批評家のために公けにしていた——の中の一千年至福説 (筆者註、この世の最後の一千年間キリストが再臨して世界を治めるといふ説) と平和主義とについての口ぎたないが、しかし詳細な批判を公けにしていた。従つて注意深い推理と臆測とによつて、この著作全体の輪廓を再構成することはできた。しかし今やハレー稿本——それは草稿のみならず印刷したものも含んでいるが——の発見によつて、七卷全部のテキストが利用できるよつた。

全七卷から成るこの著作はコメニユースの最も野心的な著作である。その著者であるコメニユースは、それが人類の福祉に対する最も大きな貢献であると考えていた。その眞の価値についての詳細はどうか、とにかくわれわれはそれがコメニユースの生涯の事業を導いた汎知主義的・一千年至福説的並びに平和主義的思想に関する彼の最後の、そして最も入念な論文であると考えざるを得ない。従つてわれわれがヨーロッパの思想史におけるコメニユースの地位を正しく評価するためには、新しく発見された五卷を加えた全七卷についての周到な研究をなすことが必要である。次にエリネックに従つて各卷の内容について簡単な説明を加えたい。

II 各 卷 の 内 容

1. 献 辞

献辞の標題は「ヨーロッパの光」(Europae Luminibus) である。それは学問があり、敬虔で、且つ卓越した人々に対して呈せられたもので、全七卷の全体的構想の輪廓を描き、問題を七卷にわけて考察する旨のことを述べたものである。

2. 「汎覚醒」(Panegersia)

ここでは人事を教育・政治・宗教に分類して考察する。従つて次の三種の人間関係を概観するのが著者の仕事である。(1)人間と、人間が支配すべき事物との関係、(2)人間と、人間が友好と平和とをもつて共に生活すべき同胞との関係、(3)人間と、人間がつねに服従すべき神との関係。著者によれば、これらの関係を神の意志に一致させることが可能であるが、しかし人類はそうすることができなかつた。従つて人間に関する諸事を全く混乱状態におくことになつた。そこで著者は人事の改善が可能でないかどうか、人間の悲惨に対する憐れみをかき立て、人間の運命の改善に対する願望に火をつけることによつて、普遍的な覚醒すなわち汎覚醒 (Excitatorium universale) をもたらすことができないかどうかを問題にする。

3. 「汎黎明」(Panaugia)

ここでは汎覚醒が招来される道行きが示されている。人間の心から暗黒を追放することができ一つの大きな力は、万物を貫徹する思想の光であるというのがその結論である。これは「汎黎明」に導く「普遍的な光の道」(Lucis universalis via) である。

4. 「汎整合」(Pantaxia)

これが著者が前に汎知 (Pansophia) と呼んだものである。この巻は、思想の普遍的な光によつて、われわれは、いかにして万物を分類し、各々の物をその正しい位置におくことができるかを示したものである。われわれは思考を現実の事物に一致させることによつて、存在の偉大な連鎖に相応した思想の切断し難い連鎖をつくり出す。このようにして、われわれは万物の眞の本性・秩序及び様式を知るための首尾一貫した、堅実な創造観を確立する。これが「事物の汎整合」

(*Rerum universalis coordinatio*) の仕事である。

5. 「汎教育」(*Pampaedia*)

いかにして万物の本質的關係を理解するかの方法をあらゆる人々に教えるためには、まずいかにして人間の心をして普遍的な光をとらえさせることができるかを知らなければならない。従つて汎教育は「人間の精神の汎開化」(*Universalis cultura mentium*)の問題を探究することになる。

6. 「汎言語研究」(*Panglottia*)

この巻は普遍的な光を普及させ、それをすべての国民や民族に滲透させるための手段を発見することを目的とする。知識はまだ言語という手段によつてのみ伝達され得るが故に、この巻はもつぱら「諸言語の普遍的な修得」(*Linguarum universalis cultura*)を問題にする。

7. 「汎改革」(*Panorthosia*)

これまでの諸巻において素描された諸改革によつて、われわれは教育的・宗教的並びに市民的諸事における改革を招来することができるであろう。ところで、われわれは、いかにして啓蒙・敬虔並びに平和の時代を始めることができるかを示すのが、この巻の目的である。すなわちそれは「汎改革」(*Reformatio universalis*)を取り扱つたものである。

8. 「汎勸告」(*Pannuthesia*)

これらの提案の実行可能性が確立されたら、すべての教育を受けた者、すべての宗教的思想家並びに世界のすべての君主は、然り、すべてのキリスト教徒は、これらの重要な事柄について真剣に考え、これらの計画を実現させる仕事に没頭すべきである。この行動へのいざないが汎勸告(*Exhortatorium universale*)である。

RÉSUMÉ

On the Newly Discovered Works of Comenius

As the newly discovered Halle Manuscripts, works of Comenius, have not yet been referred to in the literature of Comenius published in Japan, I want to make clear the value and the contents of them, being guided by Professor V. Jelinek.

The Halle Manuscripts mean those discovered by Professor Čyževskij in the archives of the Waisenhaus in Halle in 1935. The reason why those attract wide attention is that those contain Parts III-VII of Comenius' *Consultatio*, which had been considered lost until 1935. The *Consultatio*, consists of seven parts. The Dedication and the first two parts were printed during his lifetime. And these are introduced briefly in Professor Umene's "Comenius", but the other parts are not referred to in it.

Now the seven parts of Comenius' *Consultatio* are within reach. The titles of those parts are as follows. The title of the Dedication is *Europae luminibus*. I Panegersia (Universal Awakening) II Panaugia (Universal Dawning) III Pantaxia (Universal Correlation) IV Pampaedia (Universal Education) V Panglottia (Universal Language Study) VI Panorthosia (Universal Reform) VII Pannuthesia (Universal Admonition).